

## 第8話「水の都・三島の街づくり」

静岡県三島市は東海道の宿場町、源頼朝ゆかりの三島大社門前町などで有名ですが、豊かな水の景観に恵まれた水の都としてもその名を馳せてきました。それは、新富士火山の活動によって噴出した溶岩流が箱根火山との裾合谷(すそあいだに)を南方に流下し、三島市周辺まで達しているのですが、この溶岩のなかに湛えられた地下水やその露頭である湧水がさまざまな水風景や水的话题を提供してきました。



写真-1 湧水が涸渇し溶岩のみの鏡池

富士山東麓一帯の地下水調査は、戦後の開拓地の農業用水や生活用水の水源確保に始まりました。そののち、地域開発に伴う工業用水や人口増加に伴う水道用水の揚水や取水が進行し、その確保のために地下水の流動量や賦存量の調査によってその実態が解明されてきましたが、地域の水循環や水環境は急激に変貌しました。それは、たとえば地下水位の低下、湧水量の減少や涸渇などにあらわれ、三島市では、時期的には昭和30年代中ごろから表面化したようです。菰池(こまいけ)の西にある鏡池では昭和30年代始めに涸渇し(写真-1)、昭和29年(1954)に名勝天然記念物に指定された楽寿園小浜池(らくじゅえん こはまいけ)も昭和37年(1962)3月には初めて湧水の完全な涸渇をみるにいたしました。

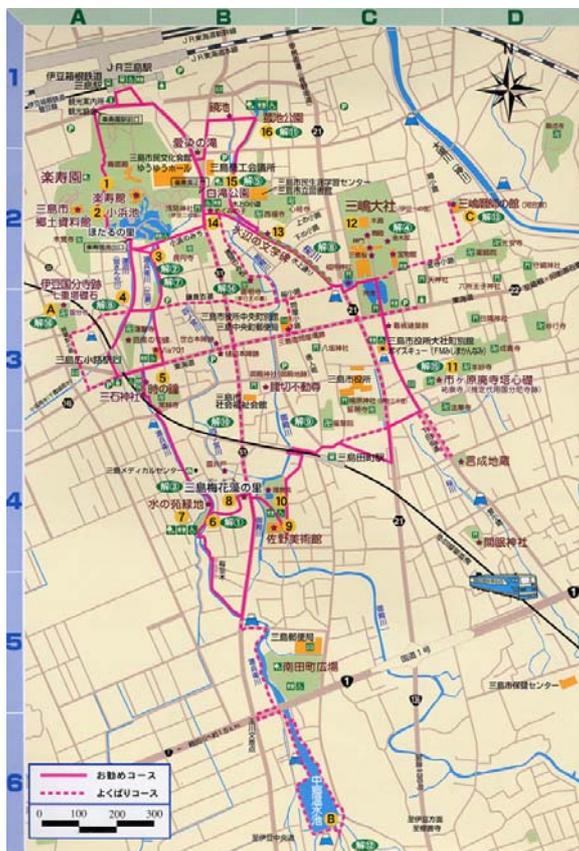
三島市一帯の地下水涵養地域でもある黄瀬川(きせがわ)流域の谷底低地は複雑な地形をもち、取水が困難であったことは、江戸時代に開田にあたって箱根芦ノ湖の水を箱根用水として導水した歴史などでも理解できます。しかし、この地域の都市的土地利用が進行するにつれて、水利用や水循環の形態が変化し、その影響は大きかったようです。そのような状況の中で、行政や市民の水に関する意識が高まり、地下水位や湧水量観測、水資源調査、湧水を守る会の発足、実現はしなかったものの黄瀬川水系地下ダム構想などの動きがありました。



写真-2 菰池

また、三島市では、1982年に小浜池調査委員会をたちあげ、涸渇している小浜池の湧水の復活を目的に調査を開始したところ、その年の9月には13年ぶりに池の水位が190cm<sup>1)</sup>に達したという記録があります。その後、1984年には三島市は国土庁水緑都市モデル地区の指定をうけて、水と緑と文化のまちづくりに向けての整備事業にとりかかることになります。なお、三島市では、このあと、1988年から小浜池湛水調査、1993年から地下水涵養機能調査などをもとに地下水と湧水の復活を願いつつ仕事をすすめています。

このような湧水の復元にかかる仕事とともに水の都・三島では、湧水を水源とした水路沿いの修景も水辺のプロムナード整備事業としてすすめられ、都市景観形成にも寄与しているのです。河川として、楽寿園小浜池から流出する源兵衛川(げんべえがわ)と宮さんの川(みやさんのかわ)蓮沼川あるいは小浜用水とも呼ばれる)、白滝公園から流れる御殿川(ごてんがわ)、菰池(写真-2)を水源とする桜川などが整備され、街中がせせらぎでみだされる風景を目標にしています(写真-3、4)。そして、流量の不足している時は、工場からの工業排水で補填されています。また、三島市出身の詩人大岡信氏はじめ地域ゆかりの有名者が三島せせらぎ大使として、三島の水の素晴らしさを全国に発信する役割を担っておられます。



三島周辺の地図

三島市商工会議所より許可をいただき  
三島市観光協会のHPから同じ地図を掲載しています。



写真-3 源兵衛川沿いの水の苑緑地



写真-4 源兵衛川沿いの人と水の交流空間

ところで、三島市ではこのような行政主導の水に対する働きとともに市民が主体となった取り組みが地域の特色になっています。三島ゆうすい会、1992年に誕生したNP0法人グラウンドワーク三島などがその中心です。グラウンドワーク三島は2005年に、朝日新聞主催の環境分野で優れた活動をしている団体に与えられる「明日への環境賞」(第7回)が授与されました。ゴミ捨て場のように悪化していた源兵衛川の水環境を蘇生させて水辺の遊歩道を設置したり、三島梅花藻<sup>2)</sup>を復活させ新しい水環境を創造させるなどの実践活動がその対象でした。地域の宝物でもある地下水や湧水などの水環境をもとに、新しい時代の親水思想を定着させ、都市景観を創造させた水の都・三島の地域再生はひとつの範となるでしょう。



写真-5 三島梅花藻の里と水神

注釈 1) 小浜池の水位は、楽寿園の管理事務所によって観測されており、その水位観測基準点を±0としている。1982年は4~5月頃は-100cmと低かった水位が台風による降雨により急上昇した。各年により 水位はめまぐるしく変化している。

2) ミシマバイカモは、清流に育つキンボウゲ科の多年草で、楽寿園の小浜池で発見されたのでミシマバイカモと名前が付けられた。(昭和5年 中井竹之進博士) 水の中に緑色の沈水葉と梅の花に似た白い花を水面に咲かせ、水面近くに5つ以上の手のひら型の浮き葉をつけるのが特徴。昭和30年代より湧水の減少と共に姿を消していった。現在、三島梅花藻の里にて柿田川に生き残ったものを移植して育てている。